

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成27年7月27日（第7号）

発行：島田療育センターはちおうじ

私が「いのちの授業」を始めるときに、まず相談したのが東北大学小児科の田中総一郎先生でした。「奇跡がくれた宝物—いのちの授業」も総一郎先生のメッセージから始まります。その2回目です。

所長 小沢 浩

「はじめに（その2）」

「うまれてきてくれてありがとう」は、親から子どもへ、生きる力を与えてくれる、とても大切な言葉です。しかし、それが簡単に伝えられないことがあります。

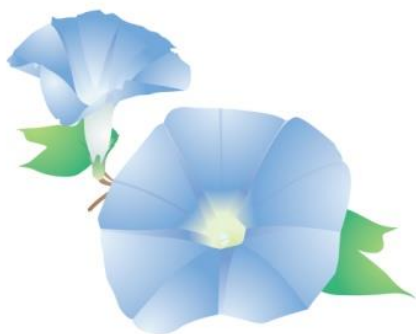
障害のある子どもがうまれてきて、最初に出会う私たち医療者の仕事は、うまれてきたばかりの子どもへ診断を与えることをその使命としてきました。そのために、お母さんたちは、のどまで出かかっていた「うまれてきてくれてありがとう」の言葉を言えなくなってしまっているとしたら、そんな苦しみと悲しみを与えてしまっているのだとしたら、われわれ医療者は考え直さなければなりません。診断や評価は、もとより、その人の一部分についてのこと、たとえば、障害をもってうまれてきても祝福できる社会と医

療者でありたいと思うのです。なぜなら、人は診断や評価の対象ではなく、人は愛される存在だからです。



いま、脳死判定や出生前診断という「命の選択」を迫られる課題が身近になってきました。冷静な判断のために客観的な知識を正確に伝えることの重要性はもちろんですが、それとともに、子どもたちには「いのちがもつあたたかさ」を忘れないでいてほしいと思います。あなたたちは愛されるためにうまれてきたのですから。

第二次世界大戦のとき、ナチスによるユダヤ人強制収容所アウシュビッツを生き抜いたフランクは、理不尽で過酷な毎日でも希望をもち幸せになれる方法の一つとして「愛する人のことを心の中で想うだけでも少しは幸せになれるのです」と教えてくれています。生きる希望は愛された記憶からうまれてくるのですね。



「いのちの授業」は、最後にこんな質問で締めくくることがにしました。

「みんなの体はなんのためにあると思う？ 口は？ 手は？ 頭は？」

子どもたちは口々に自分の考えを発表してくれます。

「口は、ご飯を食べるためにある。」
そう、自分の体を自分のために使うことは一番大切。

「手は、困っている人がいたら手を貸してあげる。」

なんてやさしい！ 自分の体を人のために使うことはとてもいいことです。でも、あなたたちの体は、かわいがられるためにもあるんだよ。

「頭は、人になでてもらうためにある。」

2014年5月
東北大学小児科
田中総一郎

『奇跡がくれた宝物—いのちの授業—』
小沢浩著、クリエイツかもがわより

